

## 式辞

皆さん、ご卒業おめでとうございます。この歴史ある武蔵学園大講堂で式典に参加していらっしゃる学生の皆さん、ご父母の皆様、関係者の方々にも、心からおめでとうと申し上げます。

また、本日は、池田学園長、同窓会副会長の志方様、父母の会会長の石野様にご臨席いただき卒業式、そして大学院学位授与式を挙げていきますことを大変嬉しく思います。

武蔵学園は、学部卒業生の皆さんが入学された二〇二二年度に創立百周年を迎え、今は次の百年に向けて進み始めている時です。皆さんも、武蔵学園とともに次の百年を目指して力強く歩み続けてください。また、今回の卒業式は国際教養学部の卒業生が初めて新たな一歩を踏み出す記念すべき式でもあります。

皆さんの卒業、修了にあたり、入学式の時にも触れたと思いますが、武蔵大学の前身である旧制武蔵高等学校の建学の三理想について改めてお話ししたいと思います。なお、これ以降は、学部卒業生の皆さんを対象としてお話しさせていただきますので、大学院修了生の皆さんは自らの立場に置き換えて、お聞きくださるようお願い申し上げます。

第一は「東西文化融合のわが民族理想を遂行し得べき人物」を育てることです。

東西文化融合は、古くは、ひらがなやかたかなの誕生もそうですが、明治維新後、私たちは西洋からさまざまなことを学びながら、日本独自の文化や技術を作り出してきました。

明治維新の元勳(げんくん)と言われる大久保利通らが参加し、岩倉具視が率いた岩倉使節団のことは歴史の教科書やドラマを通してご存じと思いますが、久米邦武(くめくにたけ)という人が、この使節団の活動を克明に記録に残しています。

その中で、私にとって印象的であった記述は、エレベーターを小さな部屋と勘違いして、動き始めてびっくりするなどの経験をしながら、「欧州今日の繁栄は、西暦一八〇〇年以降のことであり、今からわずか四、五十年前からのことである」と言い切っていることです。実際、それから半世紀の間に、日本はモーターや蒸気機関車の国産化に成功しています。

このようなこともあり、日本人による固有の文化や技術を新しい文化や技術に融合する能力は、明治時代に日本を訪れた多くの外国人が認めるものとなりました。

グローバル化はある意味、世界を一つの基準で動かしてしまう、一つの商品ですませてしまおうとする恐ろしい力を持つものです。しかし、その中であっても、日本古来の文化や伝統をどうすれば

維持できるのかを考えながら、急ピッチで進むグローバル化社会を生き抜いてほしいと願っています。

第二は、「世界に雄飛するに耐える人物」を育成することです。

世界雄飛は、旧制武蔵高等学校が設立される四年前に、第一次世界大戦が終わったことを思い出してください。国際問題は、もはや日本とアメリカなどの二国間で解決できる範囲を超え、文字通り、世界規模で対応しなければならぬ時代になりました。それをいち早く取り入れた建学の理想ということができます。

第三は、「自ら調べ自ら考える力ある人物」を育てることです。

世界の国々の中で紛争が起り、新たな秩序が模索され始め、人工智能に代表されるような新しい技術がより身近なものになっていく中で、初めから正解があるような問いは益々少なくなるでしょう。

自ら調べ自ら考えるは、正解は他者から与えられるのではなく、答えは自分で導き出さなくてはいけない、そのためどのような力が求められるのかを表したものと考えられます。

大学を卒業されると、皆さんの目の前にあるのは「未来」です。その未来を語る時、不思議と楽観論よりも悲観論が支持を受ける傾向があります。これからの百年を考える時も放っておくと、思考や議論は悲観論、悲観論へと傾いてしまう傾向があります。しかし、楽観論が当たらないように悲観論もよく外れます。

例えば、明治時代の文豪である島崎藤村の小説『夜明け前』の一節には次のような文章があります。つまり、

今に日本の言葉もなくなって、皆英語の世の中になると考えるものもある

という文章です。もちろん、英語の重要性は日々増していますが、今も多くの仕事で日本語が必要とされています。

また、生成AIに代表されるような革新的な技術が登場するとさまざまな考えや予想が飛び交います。例えば、一九九〇年代後半にインターネットが急速に普及した時には、私たちの社会から距離という概念は消え、立地は意味を持たなくなり、また競争優位と企業規模の関係は消滅するといった主張がなされました。もちろん、方向性としては正しかったのですが、今も距離は存在し、立地は企業経営や私たちの暮らしに大きな意味を持ち、多くの分野で規模の優位性は存在しています。

今登場している技術も、さらに高度に発展し、いずれ利用のルールが確立されて、社会活動の中で必要不可欠なものになることは間違いないと思われれます。

しかし、どの程度まで私たちの生活を変えてしまうのかは現段階では未知数ですし、それを決めるのは私たち自身です。

私たちが未来は明るいと信じている限りは、そこに悲観論が入り込む余地はありません。未来は外部環境によって左右されると同時に、社会を構成する私たちによって大きな影響を受けるからです。

皆さんは大学での知識、つまり知の世界の旅を終えて、新しい一步を踏み出すこととなります。しかし、大学を卒業しても知の世界の旅は終わりません。むしろ、これからは大学生活の何倍もの時間をかけて、それぞれの知の世界を歩き続けることとなりますが、その前に私からお伝えしたいことがあります。

ひとつは、より高度な「知の世界」が、皆さんを待っていることです。知の世界には状況や文脈に依存しないものと依存するものがあります。状況や文脈に依存しないものは、例えば熱量とは何か、それはどのように計算されるのか、もしくは数学の定理や物理の法則などといった誰がいつ問いかけても答えは同じものに相当します。一方、状況や文脈によって答えが変わる知とは、この企業の経営を立て直すためにはどうすれば良いのか、豊島区でも中野区でもない、この練馬区の課題を解決するためにはどうすれば良いのかといった、対象や場所、そしてタイミングが異なると、同じ問いでも答えが変わるものです。

一回限りで賞味期限が過ぎてしまうようなものですが、社会に出るとそのような問いかけが皆さんを待っています。絶えず動いていて、その都度、状況や文脈が変わる中で最善の判断を行い、行動を起こす能力です。それは、経験を積み上げながら、こういう状況ではこれであると判断できる能力とも言えます。古代ギリシャの哲学者であるアリストテレスは、このような実践的な知に加えて、そこに高度な倫理観が加わった知をフロネシスと呼びました。皆さんには、ぜひ倫理観が備わった実践的な知を蓄えていただきたいと願っています。

もう一つは、「知の世界」の旅は一生終わることがないということです。本学の第四代人文学部長を務めた伊能敬(いのう たかし)先生の直系の祖先でもある伊能忠敬(いのう ただたか)が中心となって、江戸時代後期に日本全土の実測地図が作成されました。その伊能忠敬が測量技術を本格的に学び始めたのは、家督を長男に譲った五十歳の時、初めての測量のために蝦夷地に旅立ったのは五十五歳の時と言われています。多くの人が五十代で亡くなった時代であることを考

えると、今の感覚では、七十歳くらいから新たな学びを始めたようなものと考えられます。

大学を卒業したからといって、「知の世界」との縁がなくなることはありません。社会人になった後は、大学時代とは異なる学びの形を自分なりに作り上げてください。

最後に、多くの皆さんは来月の四月からは企業などの組織の一員として働くことになると思います。私が武蔵大学を含めて組織の中で働き、そこで学んだことの一つは、組織にしても地域にしてもそこに求められる全体の仕事は四角いかたちをしているということです。その一方で、地域の人や組織に働いている人に本来、もしくは最低限、割り当てられている義務や仕事の形は丸です。

想像していただくと思われるように丸だけでは四角を埋めることはできません。すき間が必ず残ります。このすき間は誰かが埋めなければ地域にしても組織にしても正常に機能しません。私は、皆さんには、丸だけで埋められない役割や仕事を率先して行う社会人になってほしいと思います。

それは、もしかしたら損得勘定抜きで他者に尽くすことになるかもしれませんが、人は自分のために頑張ることには限界がありますが、他者のためであればその限界を乗り越えることができます。武蔵学園は、創立者である根津嘉一郎のそのような精神が出发点になっていることまでぜひ思い出してください。

倫理観が備わった実践的な知を蓄え、いつまでも知の探究を続け、組織や地域の中で丸いままできとまらないことを忘れずに、この変化の激しい社会を生き抜いてください。

皆さん、ご卒業おめでとうございます。これからも武蔵のことを思い出したら、いつでもキャンパスを訪ねてください。

令和八年三月二十二日 武蔵大学長 高橋徳行